International IC Association of Japan

IIAJ

NEWS NO.103

（社）国際IC日本協会機関誌
発行年月日 2003年11月10日
発行所　（社）国際IC日本協会
150-0031 東京都渋谷区桜丘町13-9
クリエート桜丘センチュリー21 506号
TEL:03-5459-5703 FAX:03-5459-5706
E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　橋本　徹
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

◇第57回コーIC世界大会レポート◇

『世界という我家～対立からコミュニティーへ～』

今夏のコーIC世界大会は、7月2日から8月17日までの約1ヶ月半にわたり『世界という我家～対立からコミュニティーへ～』の総合テーマの下、次のページに示した6つの会議が開かれました。

今回の会議には日本から相馬雪香国際IC日本協会名誉会長、橋本徹同会長、鬼丸昌也テラ・ルネッサンス代表を含む7名が参加しました。又、日米欧経済人コー円卓会議も発祥の地、コーに久々に戻り会議が開催され、日本から金子尚志経済人コー円卓会議日本委員会会長を初めとする10名が参加しました。

主な会議について…… 人間を大切にするグローバリゼーションとは？

「グローバリゼーションがもたらす影響は社会をどう変えるか。人間が大切にされているか?」第30回コー産業人会議（CCBI:Caux Conference for Business and Industry）はこのテーマの下で、財界、政界、マスコミ、地域開発団体などの代表175人が参加して開催されました。メインスピーカーは世界銀行欧州副議長J·Eリチャード氏、世界経済フォーラム役員ホセ・マリア・フィギュレ氏、世界社会フォーラム共同創始者イグナチオ・ラモネ氏も含まれています。会議のハイライトはラモネ氏とフィギュレ氏の対談、「グローバリゼーションの議論のすすめ」とリチャード氏の著書「20のグローバルな問題、それを解決する20年」についての同氏のプレゼンテーションでした。コー産業人会議（CCBI）の30年の歴史を振り返って見ると、これは単なる普通の産業会議ではないことに気付きます。今年は特に世界級の素晴らしい講演者のスピーチを聴くことが出来ましたが、スピーチが余りに多かったため、チェンジをもたらすために一人一人が何をコミットすべきか考える「静かな時間」を持つことが充分でなかったかもしれません。加えて、グローバリゼーションのインパクトを真剣に考える時、アフリカ、アジア、ラテン・アメリカなど多様な国々からの参加が特に必要であることを痛感しました。

今年の会議には、世界銀行、WTO（世界貿易機関）、WEF（世界経済フォーラム）、WSF（世界社会フォーラム）など国際機関等からも代表が出席しました。会議ではこのような代表者と示唆に富んだビジョンとそれを実践に移す戦略的な行動について語り合えたことは、又とない良い機会でした。今後は既に立案されたものを確実なものにするための献身的な大規模なチームが出来ることを期待しています。皆さんのご意見をお寄せ下さい。CCIBに関する詳細は「For A Change」誌の次号とCCIBのホームページwww.cauxiniativessforbusiness.orgをご覧下さい。

スティーブ　グレイスドルフ　CCBIチーム

（この会議はWorld bulletin 9月号の記事を中島信子さんが翻訳して下さいました）

■主な内容■

◆第65回コー世界大会レポート・1-5
◆第18回コー円卓会議レポート 6-8
◆中国国際交流協会代表来日報告・8-9
◆インドネシア会議レポート・10-12
◆第26回小田原国際会議レポート・13-19
◆ICニュース・20

「平和作りのイニシアティブ」会議に75カ国の代表が出席

現在も内戦等紛争の続く、または紛争を克服した国々等から集まった人々が互いに学び合うこの会議は今年で13年目を迎えました。ナイジェリア、シエラレオネ、コンゴ、ルワンダ、ブルンジ、ウガンダ、リベリア、ジンバブエなどアフリカからの20ヶ国を初めとした、世界75カ国からの参加者、450名程が参加しました。その他にも、主なグループとして、イスラエルとパレスチナの代表、そして、インドネシアの西パプア地方の代表も参加しました。開会式では95年のコー・スカラーズ・コースに参加し、現在は西アフリカ平和構築ネットワークのエグゼキュティブ・ダイレクターを務めるサム・ドー氏より、「複雑で暴力に満ちた世界の中での平和作り」のテーマで講演がありました。ヨーロッパでの大戦が6年で終わったのに対し、スーダンでの内戦は20年以上も続き、2百万人が死亡、4百万人の難民が発生、リベリアでの内戦は7年半、第1次アフリカ大戦とも称されるコンゴでの内戦では4百万人近くが死亡、94年にルワンダで起きた虐殺では90日の内に、80～100万人が死亡、そして、北ウガンダ等での子供の誘拐とチャイルド・ソルジャー化、更にはエイズや汚職等、アフリカでの状況について語る内容はショッキングなものでした。しかし、何故アフリカの人々がそのような状況をもたらすようになってしまったのかを問い直すと共に、アフリカに平和をもたらすために活動を続けて行きたいという信念を述べて話を結びました。

毎朝の全体会議では、「平和作りの方法と技術」、「平和を作る人となるための個人的な資質」、「女性と紛争解決」、「信頼構築のプロセス」、「希望の理由」、「困難な平和作りに取り組む」といったテーマで、ヨルダン、インド、パレスチナ、イスラエル、オランダ、スイス、オーストラリア、ウガンダ、インド・ナガランド、アメリカ、コンゴ、ケニア、シオラレオネ等からの参加者がそれぞれの体験を話しました。

●現在の状況や文化等を紹介する西パプア地方の代表

7月2日（水）～9日（水）
責任感と奉仕の精神を備えたリーダーシップを求めて
7月11日（金）～15日（火）
コー産業人会議　～人間を大切にするグローバリゼーションとは～
7月17日（木）～24日（木）
ファミリー会議　我家～対立からコミュニティーへ～
7月26日（土）～30日（水）
世俗的な社会での精神的要素
～宗教は平和作りのためのパートナーとなりうるか？～
8月2日（土）～8日（金）　平和作りのイニシアティブ
8月12日（火）～17日（日）人間の安全保障を通じた紛争予防

希望を与えるコー

内戦の続いて来たシオラレオネからの参加者は、「70以上の国々の人々が世界をより良くしようという勇気ある目的のもとに集まっているコーは重要です。コーの精神は、紛争国からくる人たちに憎しみ、分裂、そして悲惨な政治を乗り越え、まだ心を遣いあうという世界があるのだという慰めを与えてくれます」と語りました。又、コンゴの元労働大臣（現上院議員）の女性は、「1996年に初めてコーに来ました。帰国して民主主義の実現のために活動したため、投獄されました。30年の独裁政権下、5年の内戦で4百万人が死亡し、多くの難民が出ており、コーに来た時には心が重かったのですが、コーで希望を見い出し、バッテリーをチャージすることができました。現在、国で人気のある3～4名の閣僚は、皆コーに来たことがある人たちです。コーのメッセージとあり方がもっと世界に敷衍されるべきだと思います」と述べました。

特にアフリカの人々は勿論、世界からの参加者に勇気と希望を与えてくれたのは、ケニアのジョセフ・カランジャ氏のスピーチでした。

最初に、「私はアフリカを愛します。アフリカの人間であることを誇りに思います」と元気に宣言した氏は、「インド留学時代にICパンチガーニ・センターでICスタディコースに参加しました。94年にインドから帰国。弁護士として、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）との契約の下、4万4千人のルワンダ難民の受け入れを2週間にわたって空港で行いました。インタビューをしたルワンダ難民の家族の「全てを失ってしまった」という話に衝撃を受け、国の為に働かなければ、自分の運命も同様のものになるかもしれないと感じました。95年から3年間、ICの専従として働く決心をしました。台湾でのIC主導によるクリーン・エレクション・キャンペーン（選挙浄化運動）にヒントを得て、汚職をしない、受け取らないという、選挙浄化運動を始めましたが、48万人以上が誓約書にサインをしてくれました。教会やモスクの指導者を訪ね賛同と協力を得ました。ジャーナリストの支援も得、新聞等でも大きく報道してもらいました。選挙後も、より良い国を作ろうとクリーン・ケニア・キャンペーンを続けて行いました。又、第2回のクリーン・エレクション・キャンペーンを行いましたが、今年の1月の選挙で、独立以来39年続いた政権が破れまし

た。新しい政権は汚職をなくそうと努めているため以前より税収もあがり、教育、ヘルスケアー、道路の整備等によりお金を投入できるようになり、他のアフリカ諸国の注目を集めるようになっています。来る12月20日から26日にかけて、西アフリカ各国の青年指導者を集めて、将来の清廉な国の指導者に育てるためのIC教育プログラムであるクリーン・アフリカ・キャンペーンを始めるために準備中です」と述べ、会場の参加者からは絶大な拍手が沸き起こりました。

又、イスラエルとパレスチナの人々も共に壇上から話をしました。パレスチナ人のためにNGOの活動をしているイスラエルの女性の謝罪に対し、パレスチナ人からはその謝罪を受け入れる言葉が語られました。彼らの間では4回にわたって深い話し合いが持たれました。

「人間の安全保障と紛争予防」の会議

コルネリオ・ソマルガICスイス会長の「人間の安全保障と紛争予防の形成」のテーマでの講演からこの会議は始まりました。翌日からの全体会議では、「不安の個人的な理由」、「非暴力的な方法で不安に対処する方」、「エイズの危機に直面しての基本的なニーズに応えるために」、「持続可能な環境保全」、「他の人を理解する」「平和の為にパートナーシップを築く」、「国連と多国間から成る組織の将来」、といったテーマで各国からの参加者の話がありました。不安や排除といった行為が蔓延する中で人間はどのように貢献できるのか、何処に人間の決意と責任が存在するのか、そもそも人間であるということは何を意味するのか等の投げかけられた質問に、参加者は皆考えさせられました。毎日行われるこの本会議では一人一人が内省（自分の中で熟考してみること）への旅に誘われました。

「お互いを勇気付ける」というテーマの閉会式では、参加者がこの会議でそれぞれ学んだこと、決心したこと等を披瀝しあってお互いの健闘を誓いあいました。

「持続可能な環境保全」のセッションでは、アフリカに本拠を置く始めての国際的NGOであるエチオピアのENDA（Environmental Development Action）の環境保護への取り組みの話しの後に、日本の鬼丸昌也さんから、カンボジアでの地雷がいかに人々を苦しめてきたか、又、その事実を知って、自らNGOを立ち上げ、その撤去のためにどのように活動してきたかを分かりやすく話してもらいました。日本の若い青年の素晴らしい活動は参加者に大きな感動と刺激と与え、スピーチの後には、もっと話を聞きたいと、各国の人々から食事やお茶にと声が掛かりました。

「他の人を理解する」のセッションでは、カナダの白人とインディアンの青年たちをワークキャンプで共に生活させて行く中で、特に白人の青年たちが、最初否定的だったインディアンの青年たちの態度や考え方を文化の相違と認識し理解を深めて行く過程がケーススタディとして報告されました。

「平和の為にパートナーシップを築く」のセッションでは、ケニアでの「ソマリアのための平和会議」を抜け出して参加した暫定政権の副大統領がスピーチをしましたが、「現在ケニアで開催されている平和会議には、コーに来てその精神を学んだソマリア人たちが含まれています。コーに心から感謝します」と述べました。

今夏のコーの会議でも、アフリカ諸国からの多数の参加がありましたが、ヨーロッパ、特に旧アフリカの宗主国であった国々のICの人々は勿論のことですが、宗主国でない、スカンジナビア諸国のICの人々のアフリカの人々のためのケアーに改めて感心させられました。

コーでの私のタイ人のルームメイトは、『戦後のフランス-ドイツの和解と日本-中国の和解の比較』を博士論文のテーマにしていました。戦後、1946年から50年の5年間に3,113人のドイツ人がコーの会議に招かれ、そして、同様に1,983人のフランス人が参加し相互の和解が生まれ、それが今日の独仏関係の基礎となりEUへの発展につながっています。日本と中国の戦後置かれた状況は歴史的にも独仏とは異なりますが、未だに相互の信頼関係は不十分です。その意味でも、今回日本のIC協会の招聘で去る9月22日より27日まで来日された国際交流協会の代表団の方々との交流は意義深いものであったと改めて感じました。

最後に、今年のコーで印象に残った言葉を紹介してレポートの結びとしたいと思います。

『私たち一人ひとりは、1滴の水のような存在かもしれない—しかし、それは大海の1滴ではなく、砂漠の1滴の水—渇望されている1滴である』

長野清志　（社）国際IC日本協会事務局

●熱心に聞き入る各国からの参加者

●キッチンで働く橋本会長。コーではお互いに奉仕し合う

コーで感じたこと

ソン・ホチョル（成 豪哲） 中央大学３年生

在米コリアンのキムさんと話して

今回、自分はコーに来て初めて在米コリアンの人と出会うことができました。しかも、日本とアメリカを遠く離れたスイスの山奥で会うのは奇跡に近い確率かもしれません。ただ、悲しいことに彼女は英語、私は日本語と朝鮮語がしゃべれるのみで同じ民族でありながらコミュニケーション、言葉の壁が作られていました。その場は、彼女が朝鮮語を少し話せたのが幸いし、また少し日本語をわかることもあって、朝・日・英の三ヶ国語をミックスして喋りました。本当は自分たちはハングルを使い、それをもって相互間のコミュニケーションを図れたはずなのに、同じ民族でありながらなぜ言葉の壁ができてしまうのか、ここにも植民地政策が残した暗い影がありました。そして、ここコーという場所はいろんな悩み、考え、希望、失望を持って人々が集まり、議論し、そして帰っていく、そういう場所なんだということを感じました。

コーを発つ最後の夜に見たもの

いつものように、仲が良くなったリー（Lee）とミッチ（Mitch）達とコー・カフェで喋っていましたが、そのうちにアンドレイや旧ソ連邦の同い年くらいの人たちと仲良くなりました。彼らに朝鮮語や日本語を教えたりしていましたが、そのうちにふと見ると、旧ソ連邦の子達がいなくなっていました。彼らがどこに行ったのかと聞くと、フロントの近くの、テレビがある場所にいると言ったのでそこへ行ってみました。すると、薄暗い部屋の奥深くにあった光景は、旧ソ連邦の子達がロシアのテレビのコメディー番組を一緒に見ていたというものでした。当然のことながら、テレビの内容はロシア語で、私には全く通じません。でも、彼らは国は違えど、一つのテレビ画面を見ながら笑ったりしているのです。悲しいかな、彼らはソビエト連邦が崩壊したせいで、いわば違う国の人たちとなってしまったのです。ちょうどソビエト崩壊が小学生ぐらいの頃で、その現実を直に受けた世代です。歴史を仮定的に論ずるのはタブーですが、彼らはもし国が崩壊しなければ一つのテレビ番組を見て、笑って楽しんでいたに違いありません。それを、言わば大人たちの勝手な都合によって離れ離れになり、複雑なお国の事情を抱え解決していかなければならないのです。

このような状況を南北の朝鮮半島の国民と少しすり合わせながら考えてみました。もし朝鮮半島が一つになっていたならば市民は同じ情報を共有し、行き来ができていたに違いありません。そう考えると朝鮮半島の分断の歴史、そして在日朝鮮人という自分の存在について少しながらも悲しさ、もどかしさを感じましたし、このような悲しい歴史が二度と繰り返されないようにしなければならないと思いました。

●語り合うソン君（左）とキムさん

21歳、晴れ晴れと…。大きなステップを踏む！

鹿取美江（立命館大学３年生）

私は、モントルーからコーへと向かう登山列車の中で、一人静かに20歳になりたての頃のことを思い出していました。「せっかく20歳になったのに・・・。20歳になってから全然いいことがない。それどころか、いやなことばかり起こる。この先が思いやられるなあ・・・」と、下宿先から実家の母へ、こんな話をしたことがありました。あの頃の私は、やることやること失敗ばかりで、辛いことも重なり、将来の希望さえ失うほど、落ち込んでいました。

私は、しばし物思いにふけりましたが、それはすぐに微笑みに変わりました。

「もう、あの頃の私はいない。20歳を終えようとしている今、私は希望に胸を膨らませながら、ICコー世界大会の会場に向かっている！」

私は、幸せをかみ締めました。そして、私をここまで導いてくれた石田先生に心から感謝しました。

私は、暗闇の中、自分探しの悪戦苦闘の旅の途中に、日本ネパール教育協力会というNGOでのボランティア募

集の記事を見つけ、すぐにそこへ問い合わせのメールを送ったのを機に、石田先生と出会いました。そして、私は、ボランティアスタッフとして、石田先生とともに仕事をする中で、石田先生が、ICというところに長年にわたって関心を寄せており、昨年、ICコー世界大会に参加されたことを知りました。そして、私は、ICコー世界大会に興味を覚え、「是非ICコーの世界大会に参加させていただけませんか」と先生にお願いし、ICコー世界大会に行く切符を手に、コーへと向かう登山列車の中で、希望に胸を膨らませていました。コーが近づくにつれて、胸の鼓動は高まりました。そして、車窓から、壮大なマウンテンハウスが、丘に聳え立っているのを見て、"ここがこれから私が行くところ！"と思った時の、あの興奮は、今も忘れられません。

さて、コーの駅で電車を降り、駅で私が来るのを待っていてくださった、IC専従スタッフの長野さんに案内されて、すっかり興奮しきった私は、マウンテンハウスの中へと入りました。着いてすぐ、長野さんに誘われて、お茶の席に行きました。私はその時、すっかり、興奮が冷めてしまいました。テーブルを囲んで、いろんな民族、人種、宗教の人々が楽しそうに会話をしていました。私も、会話に混ぜてもらいました。するとすぐに、「あなたは、なぜ、コーにきたのか？」「あなたは、コーに何を期待しているのか？」と、あちこちから質問が飛んできました。私は、それに英語でうまく答えることができませんでした。くやしかったです。とんでもないところに来てしまったと思いました。私は、10年後の自分がいる場所に、何かの拍子で、紛れ込んでしまい、ふらふらと、ここはどこだろう、と途方にくれているといった、そんな気分にさえなりました。その後も、私にとって、世界大会は、大変厳しいものでした。世界大会の全体会議での話は、私にはとても難しかったのです。全体会議で感じたことや、自分が今思うことについて、少人数でわきあいあいと語り合うコミュニティー・ディスカッションの時間でさえ、私は、ほとんど発言することができませんでした。私は、自分の未熟さを思い知りました。私は、何も知らなかったと切実に思いました。

しかし、世界大会も終わりに近づいてきたある時、こんなことがありました。コミュニティー・ディスカッションの席で、私は、メンバーの一人に、「明日は、コミュニティー・ディスカッション最後の日です。何か話してみませんか？」と言われ、その日、みんなの前で話すために前夜遅くまで考えて書いた、しわくちゃのメモをにぎりしめて　いました。「さあ、それでは、鹿取さんに話してもらいましょうか」と言われ、私は、メモを片手に、あのつらかった20歳になりたての頃のことや、石田先生との出会い、ボランティア活動をする中で、自分がどんどん変わっていったことなどを話しました。私は、話をしていて、みんなの暖かさを感じました。みな私の話に耳を傾け、真剣に聞いてくれました。気づくと私は、目にいっぱいの涙を浮かべていました。20歳になりたての頃のつらさがよみがえり、あの頃のことを、あの頃とは全く違う自分が、こんなにすばらしいコーというところで話していることに感動し、また、極度の緊張の中、私の話しを聞いてくれる皆のやさしさを体中で感じて・・・私の心はパニック状態でした。しかし、あの時、私は自分の殻からぬけだすことができました。私は、やっと、世界大会に参加することができたのです。日本に帰ってきてから、私は、コーでの体験や、コーで受けた心の衝撃、感動を整理するのにずいぶん時間がかかりました。ずいぶん長いこと静かな時間を過ごしました。そして、今、整理ができた私は、コーに行って本当に良かったと心から言えます。私はコーで自分の未熟さ、自分が何も知らなかったことを思い知らされました。それはつらいことでした。しかし、コーは私の中でぐるぐる巻きにされて、眠っていた赤いじゅうたんのひもを解いてくれました。今もなお、私のいるところからずっと先へその赤いじゅうたんは広がり続けています。そのじゅうたんの先を見ようとしたり、追いかけようとすると、不安になるし、焦りもします。ゴールは見えません。やらねばならないこともたくさんあります。でも、すぐ下を見ると、ちゃんと道はあります。不思議と、また何十年後かも、あのコーに自分がいるであろう確信があります。道に間違いはないはずです。私は、一歩一歩着実に、その赤いじゅうたんの上を歩いていこうと思います。

コーから戻り、現実主義ではダメで理想を持たないと社会は変わらないとも気が付きました。自分の生き方を変える努力を始め、先ずどんな人にも話し掛けられ易い人間になろうと心掛けるようになりました。

スイスから帰ってきて、数日がたち、21歳を迎えました。私は、晴れ晴れと、大きなステップを踏んで行こうと思います。

●中央が鹿取さん、右端は鬼丸さん

第18回CRTグローバル・ダイアローグ
「責任あるグローバル化のための原則について」
2003年7月7日～9日（スイス、コー）

２００３年のＣＲＴグローバル・ダイアローグは、２００３年7月7日（金）～9日（日）まで開催され、世界各国から約４０名のビジネスリーダーたちがＣＲＴ（経済人コー円卓会議）の発祥地であるスイス・コー（Caux）のマウンテンハウスに４年ぶりに集いました。

1．日本からの参加者は、以下の通りです。（敬称略）

金子　尚志（ＣＲＴ日本委員会会長、ＮＥＣ名誉顧問）
内田　　勲（横河電機社長）
内田　清子（横河電気内田社長夫人）
船橋　晴雄（シリウス・インスティテュート代表取締役）
佐久間　健（ＣＲＴ日本委員会アドバイザー）
近田　高志（日本能率協会）
森宮　千尋（日本能率協会）
金子　保久（元松下電器産業国際関係担当顧問）
須田　康司（ＮＥＣ、ＣＲＴ日本委員会コーディネーター）
石田　　寛（ＣＲＴ日本委員会アシスタント・コーディネーター）

2．決定事項

■2004年CRTグローバル・ダイアローグを日本で開催

2003年7月7日（月）GGB（Global Governing Board）において、多くのGGBメンバーから2004年のＣＲＴグローバル・ダイアローグを日本で開催することが可能かどうかという質問が集中しました。それに対して、金子会長は橋本名誉会長を通じて、すでに経団連ゲストハウスを2004年10月22日（金）～24日（日）に予約をしていると説明され、その場で日本での開催が決定されました。

■今後の日本におけるSAIP（※1）導入に向けた戦略の基本方針についての合意

7月8日（火）には、マウンテンハウスのテラスにおいて金子会長を初めとするCRT日本委員会事務局（須田氏、石田）、そして、今後欧州でSAIPの導入を検討しているメンバーとSAIPの開発に携わったCRT米国チームのメンバーが、今後の日本におけるSAIP戦略について意見交換を行いました。特にCRT米国チームは、ここ半年間で日本が猛烈な勢いでSAIPの日本導入に向け動いていることに驚きを隠せず、このままでは日本のSAIP－JAPANプロジェクトチームに先を越されるとの危機感を抱いておりました。引き続き、日米欧のCRTメンバーが各地域においてSAIPの導入に向けて、お互いに情報の共有化を図りながら進んでいくことになりました。

今後、日本におけるＳＡＩＰ－ＪＡＰＡＮプロジェクトに関しては、以下の４項目に着眼点をおきながら、プロジェクトを推進していくことを報告し、予定では2004年10月に日本で開催されるCRTグローバル・ダイアローグにおいてSAIP－JAPANの成果（結果）を発表する方向で準備することになりました。

3．主なダイアローグについて

このダイアローグでは、「責任あるグローバル化のための原則について」をテーマに以下の２点を中心に議論が展開され、多くのビジネスリーダーが積極的にディスカッションに参加しました。

(1)高齢化問題

先進国（特に日本）における高齢化という社会問題について、各自がどのような考えを持ち、どのような形で貢献できるのかについて多くの意見を交わしました。

(2)足るを知る（無駄をなくす）

次世代のビジネスリーダーが注目しなければいけないのは、無駄な商品や在庫をいかに減らすのかという問いであり、これが高齢化社会や貧困問題解決に向けての重要なテーマになるとの意見もありました。

日本におけるＳＡＩＰ導入に向けた戦略の基本方針についての合意

1．「ＣＲＴ一般原則」の真の意味を探るための分析作業を行う。
2．日本導入に向けたＳＡＩＰの商品開発を行う。
3．ＰＲ活動（特にＣＲＴ及びＳＡＩＰの認知度を高める）を行う。
4．日本においてＣＳＲ（企業の社会的責任：Corporate Social Responsibility）の認知度を高めるための活動を行う。

※1：SAIP（自己評価及び向上プロセス：Self Assessment & Improvement Process）は、「ＣＲＴの一般原則」に基づいて、米国CRT（Caux Round Table）チームを中心に議論を重ねて開発されたものである。

・開会挨拶
ジョージ・ボイタ（グローバルＣＲＴ会長）

“新しい世界経済の構造やシステムの必要性”

「グローバル経済の成長を継続するために、ビジネスリーダーが如何に真剣に貧困問題の解決に向け世界経済の構造やシステムを変革していこうと考えるのか、またそれをどう実践していくことができるのか、この国際会議を通じて一人ひとりがこのことを考えてほしい」と強調されました。

最近の動きとして、多くの国際機関（国連、世界銀行等）やコンサルタント会社（PWH等）との会合を通じて、民間企業が世界経済や金融市場の問題解決に果たす役割が大きく、又、期待されているということにも触れられました。

・議長　ハーマン・ウァイフルズ（Herman Wijffels）

ハーマン氏は、グローバリゼーションの中で、CSR化の動きが継続していくためには企業が“足るを知る”という考えを持つことが必要であることに加え、更にビジネスリーダーがステークホルダーとのリレーションシップの質を高めることの重要性に言及されました。

・プレゼンテーター
リチャード・ジャクソン（Richard Jackson）

“高齢化社会がビジネスと文化に与える影響”

「高齢者の全人口に占める割合は、通常であれば、2～3%が社会が維持できる最適なレベルであるが、現在の先進国では約15%、そして40年後には30%まで上昇し、特に欧州と日本では40%まで上昇する」とコメントした途端に会場内に緊張した空気が流れました。

この根本的な問題に関してリチャード氏は、「最近の先進国の経済状態が悪化し、収入が減少している一方で養育費が嵩んでいるためであり、少子化（一人っ子）によることが関与している」と強調され、先進国における少子化・高齢化問題が世界の秩序を変えるかもしれないという深刻な問題を投げかけました。

またリチャード氏からは、こんなコメントが最後にありました。「日本の厚生省の試算によると21世紀の終わりには、日本の人口が現在の3分2まで減少し、やがては一人になるでしょう」

●全体会議の様子

・プレゼンテーター
ロード・ブレナン（Lord Brenan）

“グローバリゼーションにおける法律”

ブレナン氏は、まず「我々の世界には様々な文化が混在していることを把握すると共に、お互いの違いを認め合い、尊重し合うことが重要である」と言及されました。またこの世界の秩序は、政治、多国籍企業、NGO、市民が関わっていますが、特にここでは企業の経営者が一番の力を持っており、その経営者が道義的精神に基づいて、活動をしなければ簡単にこの秩序は崩壊するという警告を発しました。

また、ブレナン氏は、「このような状況下において、弁護士が企業の経営者に対して、真のグローバル化についてのアドバイスができるような環境を整える必要もあり、その中でＣＲＴが他のスタンダード（特にIBA：International Bar Association及びCCBE：European Bar and Law Society Association）と連携強化を図りながら、CSRにおける具体的なプロジェクトを推進していくことを期待している」と強調されました。

●談笑する横河電機内田社長

●グローバル・ガバメント・ボードのミーティングに臨むCRT日本委員会金子会長（右から３番目）

・プレゼンテーター
リチャード　ジャクソン（Richard Jackson）

“高齢化の人口統計と人口の低下について”

グローバルな高齢化問題については、「特に先進国（欧州、日本）を中心に財政（年金）の破綻が深刻化し、人口の低下や世界経済の停滞に繋がることになる」と強調されました。その主な原因としては、発展途上国を中心に乳幼児の早期死亡と先進国における長寿による高齢者の増加問題が挙げられており、これを解決するためには、「財政問題、労働力の強化、不景気からの脱却、金融体制の強化、軍事費の削減について、積極的に取り組んでいく必要がある」と重ねて述べました。

・ディスカッション
横河電機内田社長（コメント）

「最近世界（特に先進国）では、様々な物が数多くスクラップとして廃棄されています。特に作物、工業製品などの無駄を無くせばどうでしょうか。またこれが発展途上国などへ循環できるようなシステムを構築することができたらどうでしょう。また無駄な生産をなくせば社員たちにとって余暇の時間が増え、高齢者をケアする時間ができます。このCRTがこのような無駄な部分を削除できるようなシステムを構築することを考えることを提案したいと思います」

CRT日本委員会アシスタント・コーディネーター
石田　寛

中国国際交流協会代表団が来日

去る９月22日から27日まで、当協会の招聘により、郁文顧問を代表とした中国国際交流協会代表団６名が、日本のICの方々との交流を主な目的として来日されました。これは、本年６月の第26回IC小田原国際会議に参加を希望されていたのが、生憎のSARSの問題で来日が叶わなくなりましたので、本年は、日中平和友好条約の締結２５周年という記念すべき節目の年にも当たりますので、その代わりにお越し頂くこととなった次第です。

中国国際交流協会は、この十年来、スイス・コーのIC世界大会に代表を送っている他、イギリス、スイス、ノルウェー等からICの代表団を中国に招いて交流をしています。日本からも去る2000年10月に６名のICメンバーが中国国際交流協会のお招きで訪中し、有意義な交流を行うことが出来ましたが、これは、相馬雪香国際IC日本協会名誉会長、そして、榊たか子同副会長の郁文顧問との長年にわたって培われた友情と信頼関係に負うところが大でした。

幸いに、心配された台風も丁度過ぎ去り、22日に無事到着された代表団は、浦和の京佳楽での日中友好さいたま市民会議と共催の歓迎会に臨みました。翌日は伊香保温泉の老舗旅館で日本の伝統と文化を満喫して頂きました。

翌24日には、中国大使の歓迎昼食会に続いて、日本のNGOの活動状況を学ぶ目的で、（財）野村生涯教育センターを訪問しました。金子理事長補佐、そして、理事の方々からセンターの理念や発足の経緯、現在の活動状況や平和の実現へ向けての取り組み等の説明を受けた後、中国での状況の報告もあり、今後のさらなる交流を約束しあって会合を終えました。

●箱根小学校の生徒さんたちに挨拶する郁文団長

翌25日には箱根に向かいました。生憎の天候で楽しみにされていた富士山の姿を臨むことはできませんでしたが、訪問した箱根小学校では全校37名の生徒さんと先生方から大歓迎を受けました。6名の代表団はそれぞれ1人ずつ分かれて子供たちと給食を一緒にとりました。その後には、一堂に会して、中国の地理や文化の紹介を行いました。又、京劇オペラの元となったという、西安に伝わる古い歌や2008年の北京オリンピックの紹介もありました。又、生徒さんたちからも様々な質問があり意義深い交流ができました。「中国のことについて、いろいろ知りたくなりました」、「交流したおかげでボランティア活動の自信になりました」等々、生徒さんたちも交流の楽しかった様子を感想文に記してくれました。

続いて、小田原のアジアセンターに向かい、小田原ICサークル主催の懇談会と歓迎夕食会に参加しました。アジアセンターでも中国からの正式な代表団を迎えるのは初めてということで中山啓介所長、二宮秀夫小田原ICサークル代表を初め皆さんから歓迎を頂きました。10才の時に日中戦争が始まり、銃こそとらなかったものの抗日ゲリラ戦にも参加されたという郁文代表は、「ICの精神的・道義的活動を心から尊敬しています。中国国際交流協会も論語の中の『和は尊いもの』の言葉にのっとり、その実現を目的に来日しました。30年前は、一年間に中国を訪れた日本人は9千人に過ぎなかったのが、昨年は360万人に上りました。姉妹県や姉妹都市も266組になっています。文化交流の内容も多彩となりました。21世紀は中日両国のアジア、そして世界での役割も重要になってきます」と挨拶されました。続いて、IC小田原サークルのメンバーから、「妻との関係が改善した時、子供の病気が良くなりました。こちらがいつも許す気持ちでいることが大切で、お互いを認めていければ解決につながるという、このサークルで学んだことが役に立ちました」という体験や、小田原を生誕の地とする二宮尊徳翁の国際思想学会が北京大学日本文化研究所劉金才所長との連携により発足したこと等が報告される等、有意義な交流がなされました。

続く27日は小澤良明小田原市長を表敬訪問した後、橋本徹国際IC日本協会会長との懇談を行いました。橋本徹会長の「日中は経済的な相互依存関係にあります。今後は、心の交流、人間の交流を強化して行きたい。日中には共通の精神的基盤があり、分り合える素地があるのでそれを強くしたい。基本的に大切なのは、『お互いに愛しあい、許しあい、役に立つことをする』ことで、21世紀は、日本と中国が分り合える世紀にしたいと思います」との話しに対し、郁文顧問は、「日中の友好は時代の要求であり、アジア・世界の平和のために欠かせません」と述べられ、橋本会長を初めとした、日本のICメンバーを中国に招待したいと言われました。

同夜開催された送別会では、矢野弘典国際IC日本協会副会長（日本経団連専務理事）が、「ICは世界に信頼のできる友人たちをもてるという点で他には無いユニークさを持っています。現在、経団連と中国企業家連合会が交互に日中産業シンポジュウムを開催しています。これをIC（MRA）の精神で育てて行きたいと思っています。『何が正しいか』で考えながら、相手の話を聞くようにすれば、相手も必ず聞いてくれるようになるということもIC（MRA）から学んだことです」と語りました。又、伊藤智子さんから紹介された、お互いの人生について語り合い、知り合い、心を使い合うという日本IC女性の会のプログラムにも大変関心を示され、中国の女性たちにも是非伝えたいと言われました。IC事務局の三田紗英子さんからの、日韓のICユースの交流の紹介に対しても興味をもたれ、日中韓の青年同士の交流を実現したいと希望されました。又、代表団の中で、スイス・コーに何度か行かれたフランス語に堪能なメンバーは、「大学時代の友人の多くは外国との合弁企業で働き、自分の5倍の給料をもらっています。そのことに不満を持っていたこともありましたが、コーに行って、世界の素晴らしい人々と出逢い、精神的豊かさの大切さを学んだ時、この仕事をやっていたからこそこのような機会を得られた、お金が全てでは無いと理解できるようになりました」と話してくれました。

最後になりましたが、小田原アジアセンターを初め、多くの団体、そして、個人の皆様方よりご寄付やご支援を賜りましたお陰で、今回の交流から大きな成果を得ることができましたことを改めて心よりお礼申し上げます。

（社）国際IC日本協会事務局　長野清志

「変革のための行動（Action for Change ）2003」
インドネシア会議レポート

●会議の参加者たち

2003年9月23日（火）～27日（土）

（社）国際IC日本協会事務局　石田　寛

1．経緯について

このインドネシアでは、スハルト政権時代においてＩＣの活動が抑制され、それ以降停滞していました。しかしながら、昨年マレーシアで開催されたICアジア太平洋青年会議（APYC：Asia Pacific Youth Conference）において、インドネシアから参加した学生のバクロ氏（Muhammad Bachrul Ilmi）が、このAPYCのプログラムを通じて、父親との関係を変えるというチェンジの体験を得たことにより、民族（宗教）間の争いが絶えないインドネシアにおいて、ＩＣの考え方を広めることこそが必要だと強く感じ、２００２年から母国でICの活動を始めることになりました。

また、ＩＣオーストラリア専従のロバート・ウッド氏（通称：ロブ Mr.Robert Wood）を中心としたチームがＩＣインドネシアのチーム作りに大きく携わり、その後もケアーをしています。そして、最近ようやくジャカルタ市内に小さな事務所を開設し、大学生を中心とするメンバーが活動を再開できるようになりました。

ここでバクロ氏と私との出会いについて少し触れておきます。２００３年４月にＩＣオーストラリアがコロライ・ビーチ（シドニーから車で約1時間半北上したところ）で主催した国際会議に参加した際、インドネシアから参加したバクロ氏と出会いました。バクロ氏がどのようにしてＩＣの活動をインドネシアで広めていけばいいかと相談してきた時、他人事ではないような気持になり、また更にお互いにシェアリングしていくうちに、心が通じ合うようになり、厚い信頼関係が築かれていきました。

その後、バクロ氏からメールで9月下旬に自分たちの国でICのプログラムを開催するので、ぜひ手伝いに来てほしいとの要請があり、9月23日（火）から27日（土）まで、インドネシアのジャルカルタに行くことになった次第です。

2．目的

この「Action for Change（変革のための行動）2003」とは、ICインドネシアチームが、様々なコミュニテー（イスラム、仏教、ヒンズー教、儒教、カトリック等）での対立を未然に避けるため、ICの考え方を広め、お互いに相互理解を深めていくためのプログラムを行うことを目的としています。

そして、学生主体でメンバー構成されているICインドネシアチームをサポートする格好で、オーストラリアから３名、日本から１名（石田）が参加しました。

3．主なプログラム

■9月22日（月）

Indonesian Confucinism Religion Supreme Council
（インドネシア儒教最高評議会）at Matikan

■9月23日（火）

Walubi（インドネシアヒンズー最高委員会）
⇒私は諸事情により、24日からこのプログラムに 参加。

■9月24日（水）

シャリフ・ヒダヤフラ国立イスラム大学（Syarif Hidayafullah State Islamic University of Jakarta）では、まずオープニングで伝統的なイスラムの音楽が披露された後、ICインドネシア代表のバクロさんからそれぞれのスピーカーが紹介されました。まずロブ氏からICについての説明が行われた後、クリス氏は、オーストラリアの多くの若者たちが、将来に対する希望を失い酒やドラッグに溺れているという現状について語りまし

た。マミーさんは、自らのチェンジの体験を基に、いかにICの考え方が自分の人生における大切な部分を占めるにいたったか、そして「静かな時間」について説明しました。最後に私は、自らのチェンジの体験、そして最近のIC日本協会の活動状況、特にジャパン・コリア共同プロジェクトについて説明をしました。

また、このスピーカー４人が続けて話しをするのではなく、途中でロブ氏がギターで歌を歌ったり、ICインドネシアチームがＩＣの寸劇を行ったりと、和やかな雰囲気の中で、会議は進行しました。

それぞれのスピーチが終了した後には、参加者も含めた全員で「静かな時間」を持ち、その後５つから６つのグループに分かれてシェアリングを行いました。

質疑応答の中で、学生のハリス（Haris Elfaris）さんは、「自分たちも大学で、平和構築のためには相互理解が不可欠であると認識しており、これまでいくつかのイベントを開催してきましたが、ICの様にここまで深く考えたのは初めてであり、大変勉強になりました」とコメントしました。そして、「今後どのようにこのような活動を進めていけばいいのか具体的に教えてほしい」と意見を求めました。彼はこのような活動に非常に熱心な青年で、後日夜遅くにＩＣインドネシアの事務所を訪ね、ロブ氏と私から様々なことを聞き出していました。私はこの青年の真剣な眼差しを見て、インドネシア人は民族紛争の解決を切に願っているのだから、何とか力になれないかと思い、ロブ氏と一緒に考えました。そして「静かな時間」を通して、出来れば来年このインドネシアにジャパン・コリア共同プロジェクトのチームを派遣したい、そして、民族や宗教観の違うインドネシアの学生たちとディスカッションを通じてお互いを知り合うことが大切であり、これをぜひ実現しなければいけないと考えました。

■９月25日（木）

オーストラリアからは、前述のロブ氏、バーバラ・ローラさん（通称：マミー Ms. Barbara Lawler）、そしてまだ大学生のクリストファー・ジェームス君（通称：クリス Mr.Christopher James ）が参加しました。

インドネシア大学（University of Indonesia）では、前日と同じ要領でプログラムが進行されました。しかし、シェアリング・グループ内で意見交換を行っている最中に一人の学生からＩＣインドネシアがイニシアティブをとって民族紛争を回避するため、是非相互理解を深めるプログラムを作ってほしいとのコメントがありました。これには他の学生たちからも賛同する意見が寄せられました。

■９月26日（金）

ＩＣプログラム（Puncak－West Java）では、25人乗りのバスになぜか30人以上が乗り込み、道中ギターを弾きながら歌を歌ったりして楽しいひと時を過ごしながら、ジャカルタ市からバスで約3時間ほどのプンカク（Puncak、標高約800M）という避暑地として有名な場所にある“ビラ・アブラッジャ（Villa Abraja）”に到着しました。

このプログラムには、22日からこれまで我々が交流してきた各大学の中で、関心を示した学生たちや初参加の学生を含め約35人のメンバーが集い、“より良い社会を作るためには、自分はどうすればいいのか？”というタイトルの下で、トレーニング・プログラムが１泊２日で行われました。

初日の午後は、ロブ氏がICに関する基本的な事柄を説明した後に、“静かな時間”についても言及しました。そして、この“静かな時間”を持つ際には以下の５ポイント（“感謝 Thanks”、“謝罪 Sorry”、“変わること Change”、“だれ Who”、“実行 Do”）を中心に考えることが大切であるとのコメントがあり、その後５つのグループに分かれてシェアリングを行いました。多くの学生たちは、当初このシェアリングをすることを躊躇していましたが、徐々に慣れ始めてきますと、各人が思い思い語り始めてくれました。その中で、このインドネシアでは家族同士の絆が非常に強く結ばれていること、また自分の国をどうすればいいのかを真剣に考え、そして悩んでいる学生が多くいることを強く感じました（この学生の中には、個別に恋愛問題を打ち明けて相談にくる学生も多くおりましたが･･･）。

また、マミーさんとクリス君は、個人の体験について語り、チェンジというものがどういうことであるかを説明しました。　夕食作りは、私たちののグループが担当でしたが、女性たちがリーダーシップを発揮し、男性諸氏（自分を含め）は言われるがまま、素直に彼女たちの指示に従っていました。しかし、彼らが野菜や果物などを床の上に座りながら、床のタイルをまな板代わりにして刻んでいるのを目の当たりにした時は、さすがの私も驚きました。

●真剣な表情で聞き入る参加者たち

夕食後、インドネシアの学生から私に対して、“リーダーシップ”について話をしてほしいと言われたので、約1時間かけて説明をしました。事前にIC（MRA）インドネシア代表のバクロ氏からは、今後どのようにしていけばIC（MRA）の活動をこのインドネシアで拡大させていくことができるのかという悩みを打ち明けられていました。そのことも踏まえ、団体スポーツ（サッカー）を例に挙げながら、どうすればチームを一致団結させて勝利へ導いていけるか説明した上で、実際リーダーになる人間は常にガイダンスに基づいて動いていける人間でないと無理であると述べ、“静かな時間”を有効に活用していくことの重要性を強調しました。

■9月27日（土）

早朝5時すぎに起床し、お茶の生成工場（日本でも有名なジャバ茶の工場）を見学しました。広大な茶畑の中で、当初我々メンバーはいつもの陽気なムードでギターを弾きながらICの歌を歌っていましたが、やがて自然の景色に魅了され、静かな時間を持ちながら散策している学生たちを多く見受けるようになりました。

その後、遅い朝食を済ませた後、マミーさんが、“リレーションシップ”の中で、個人のチェンジの体験を基に、家族、社会（コミュニティー）、国、そして、ひいては世界までもより良い方向に変えることが可能であると説明しました。その中で多くの学生が、民族紛争を避けるためにはどうすればいいのかと真剣な表情で考えている姿を見て、深刻な事件が起きる前に、何か早く手を貸すことが日本にとって重大な使命であるとの声が、私の心の中で響きました。

閉会式では、全員が一つの大きな輪をつくり、各人が一人づつこのトレーニング・プログラムを受講し決意したことを大声で述べました。

4．最後に

このプログラム全体を企画・立案したICインドネシアのメンバーには、感服しました。大学生たちが本気でこのインドネシアという国をより良い方向に変えるためにはICの理念しかないと、各メンバーが受け止めており、毎朝ロブ氏たちとジョギングをした後に“静かな時間”を持ちながら、彼らがシェアリングしている姿を見ていると、よくもこの1年足らずでここまで来たものだと驚きました。徐々にですがICインドネシアでは、コアグループが確立されてきており、今後更に飛躍するためには、具体的なアクション・プランを立案し、実行に移すことが必要不可欠であると感じました。

ここインドネシアに滞在中、プログラムに記載されている時間通りに進んだことはほとんどなく、彼らが後10分といえば実際は1時間であり、時間の感覚が全然オーストラリアや日本と違いました。ロブ氏と私も2日目以降、生活リズムに慣れ始め、時間に追われることなく、その時々を大切に満喫しながら過ごしていく彼らの姿を見ているうちに、次第に、時間に追われながら過ごしている我々の現代日本社会と異なり、違った意味でゆとりのある（贅沢な）生活をしていることに羨ましさを感じ始めました。

その後、ICインドネシアのメンバーと今後どのように活動を進めるべきかについての意見交換が行われました。そして、出来れば2004年8月の中旬か下旬にジャパン・コリア共同プロジェクトの学生たちに、インドネシアに来てもらい、どのようなプロセスで日韓お互いの相互理解を深めることができたのかを是非教えてほしい、またジャカルタからバリ島まで全員1台のバスに乗り込み、インドネシア各地域の大学やコミュニティーで融和のメッセージを伝えてほしいという要望がありました。

インドネシアでは、ICオーストラリアとIC日本協会がそれぞれの持ち味を活かし、まだ学生主体で構成されているICインドネシアチームをいかにサポートできるか本音でディスカッションし、お互いにベストを尽くせたことは大変有意義でありました。また今後IC日本協会が、アジアを中心に貢献していく必要性があるということが十分に認識できたことは、自分にとっても大きな成果であると思いました。

引き続き、ICインドネシア、ICオーストラリアとIC日本協会が連絡を密にとりながら、将来のICインドネシア発展のために貢献できることを祈念している次第です。

●皆で楽しく夕食の準備

第26回IC小田原国際会議レポート

より良い社会作りのために

～それぞれの能力を活かし、それぞれの責任を果たそう～

去る6月13日（金）から15日（日）まで第26回IC小田原国際会議が、『より良い社会作りのために～それぞれの能力を活かし、それぞれの責任を果たそう～』のテーマの下、アジアセンターODAWARAにて開催されました。この会議のためにオーストラリア、スリランカ、韓国から来日された方々に加え、丁度来日されていたICをご存じのインド、アメリカの方々も参加されました。更に、日本で学ぶセネガル、ケニア、ナイジェリア、ブラジル、イギリス、オーストラリアからの留学生や日本在住の、イギリス、アメリカ、そして韓国・北朝鮮籍双方を含む在日コリアンの方々等の参加者に加え、14日（土）に開催された国際交流フェスティバルには小田原や近郊に住むフィリピンやミャンマーの方々も参加されるなど、計13ヶ国から延べ150名が参加しました。本年の会議も、日韓の大学生たちに加え、各国の留学生が参加するなど、大変活気に溢れたものとなりました。また、日韓のICユースによる話し合いが行われましたが、これはジャパン・コリア共同プロジェクトとして国際交流基金からの助成を受けました。

より良い社会作りのために

開会にあたり、橋本徹国際IC日本協会会長は、「ICはより良い社会を作るには、先ず自分が変わることにより、相手が、社会が、そして世界が変わって行くと考えています。この会議を通して、胸襟を開いて語り合う、あるいは静かな時を持って自らを顧みる、そしてそれぞれの国の文化的行事を通じて仲良くなり、お互いの意見・立場を理解しあうようにしたいと思います。

現在、世界では、、イラン、アフガニスタン、パレスチナ/イスラエル等を初め色々なことが起こっており、それらの問題の解決も一筋縄では行きません。このような会議で話し合うことにより、輪を広げていき、世界中の人が国籍、宗教、信条等の違いを乗り越え、お互いに和解できる、平和な社会作りに繋げていきたいと思います」と述べました。

続いて、羽田孜元首相は、『先日、ノルウェーの首相が来日した時、お話をお聞きしましたが、日本とノルウェーが協力したならば、本当に世界の平和に貢献できるのではと言われていました。昨年もこの会議に参加されたイエンツ・ウィルヘルムセンさん(IC専従）と月に一回位朝食をとりながらどうやって平和をつくり出そうかと考えていますと言われましたが、MRA(IC)がこのように活動しているのかと改めて知りました』と述べられました。

4つに分かれて行われた分科会

翌14日には2回にわたって、

（1）ジャパン・コリア共同プロジェクト
（2）IC教育プログラム
（3）企業の社会的責任を考える
（4）国際理解と相互協力

という4つのテーマに分かれての分科会が開かれましたので、それぞれの分科会での様子をご報告します。

●教育の分科会で事例発表をする箱根小の鈴木先生と生徒たち

（1）ジャパン・コリア共同プロジェクト

日韓双方の政府に認定されたこのプロジェクトには、試験中であるにも拘わらず韓国から大学生２名が参加してくれました。正式な会議の開会に先駆けて一足早く、13日の午後から始まったこのディスカッションでは、初日から学生同士で日韓双方の思い（お互いのイメージ）や歴史観の相違について活発な議論を行い、ほぼ2日間深夜まで話し合いが続きました。また、１３日のディスカッションでは、神奈川新聞の記者の取材もあり、翌日の新聞記事にその様子が掲載されました。このような様々なアングルからの議論を通して、IC・ジャパンユースのメンバーは更に日韓関係について学ばなければならないことが多いことを再認識しました。
また、１４日の午前中には、今年８月に韓国の中学生を招いてＮＰＯ東京少年少女センターの主催するサマーキャンプに日韓のICメンバーで同行して参加する計画について話し合いました。また、午後のディスカッションでは、日韓の大学生が様々な問題を抱えるカンボジア等を訪れ、現地の同世代の青年たちと共に奉仕活動を行い、融和のメッセージを伝えるプランについても話し合いました。

（2）IC教育プログラム

IC教育プログラムでは約２０名が参加し、前半は「教育現場の現状と課題について」をテーマに、小田原市教育長の江島紘氏から挨拶を頂いた後、ＮＰＯ東京少年少女センター副理事長の神代洋一氏から「いま子どもたちに必要なもの」という題で講演して頂きました。講演の中心のテーマとなったのは、こども達から「ゆとり」が奪われている事、その結果として「あそび」、「しごと（家事の手伝いなど）」、「学び」のバランスが崩れていることへの危機感でした。
後半は、「課題の解決に向けて私達の役割は何か？」をテーマに話し合いましたが、箱根小学校の鈴木恒美先生からひとつの素晴らしい事例を紹介頂きました。それは、箱根町で困っていた外国人の話を聞いたのをきっかけに、担任のクラスの子ども達が「箱根の町を自然だけではなく、人も自慢できる観光地にしていこう！」と決意し、英語の生活マップを作成し、外国人観光客にその地図を上げながら英語で話しかけるようになったり、また外国人だけではなく、温泉にくるお年よりの方々にもやさしくしてあげるようになったりしているというお話でした。その後、その児童たちが実際にどのように行っているかというデモンストレーションをしてくれました。

（3）企業の社会的責任を考える

最初のデッスカッションでは、国際IC日本協会会長兼CRT日本委員会名誉会長の橋本徹氏が、「今、日本経済に必要なことは何か？」のテーマで話しました。単に企業が「倫理や企業の社会的責任」という言葉を外向けにPRするために使用するのではなく、経営者から社員一人ひとりに至るまでがモラルの重要性を再認識した上で、この企業の社会的責任を果たしていくことがとても大きな課題であると強調しました。
そして、次のディスカッションでは、CRT日本委員会副会長の稲岡稔氏が、「これからのビジネスを大きく左右する企業の社会的責任とは何か？」というテーマで話しました。今後の具体的な活動としてCRT日本委員会が検討しているプロジェクトの紹介を行うと共に、我々一人ひとりが真剣に取り組りくんでいかなければならないとコメントしました。その後は、参加者同士の白熱した議論が交わされ、大いに盛り上がりを見せました。

（4）国際理解と相互協力

このグループでは、「先ず各国の現状を知ろう」という趣旨で、最初に朝鮮半島をめぐる動きについて学びました。韓国ＭＲＡの事務局長のチャ・クアンソン(Dr.CHA Kwang-Sun)氏からは、今年の３月に氏が北朝鮮を訪問した際の感想を聞きました。3年前に北朝鮮の人々のために肥料を送るためのお金集めをしたのをきっかけに北への悪感情に変化が生まれ、この3月に北朝鮮の援助に関わる100人の韓国人と共に訪朝し、病院、幼稚園等を訪ね、非常にオープンに困っている現状を話してもらったこと、又、将来の南北の統一の前に、双方の人々の交流が必要なこと、そして、東アジアの平和のためには、IC(MRA)の精神が不可欠であるということなどを話してくれました。続いて、元駐日本大使を務められたキム・テジ（Prof. KIM Taezhee）現亜洲大学教授からは北朝鮮の核開発問題や南北関係の歴史的経緯について詳しく語って頂きました。更に21年間にわたって内戦が続いてきましたが、ようやく停戦の話し合いが進展しつつあるスリランカの現況についてカピラ・

バンダラ(Kapila Bandara)氏から話を聞きました。氏は昨年に続いてのこの会議への参加となりましたが、「新首相の下、昨年の同時期より治安も向上し希望が見えて来ました。しかし、長年の内戦で社会の発展は遅れ、今まで戦争しか知らなかった若い兵士の社会への適応や、本当の意味での民族和解等、これからの課題はまだまだ大きいのです」という話がありました。続いての「地球市民としての私たちの役割と相互協力」のテーマの話し合いでは、具体的な事例として、オーストラリアのマイク・ブラウン(Mike Brown)氏より「多民族の共生するオーストラリアでの融和の取り組み」に関し話してもらいました。オーストラリアの先住民であるアボリジニの人々への謝罪と融和のための活動に氏を初めとしたIC(MRA)の人々がどう取り組み国民運動にまでつながっていったかを詳しく話してもらいました。

国際交流フェスティバルの開催

14日の12時から16時までは、小田原市の山田浩子さんとIC女性の会のメンバーによる「こころを開こう」の歌を幕開けに、国際交流フェスティバルがメインホールで開催されました。小田原市の小澤良明市長、アジアセンターODAWARA所長の中山啓介氏、国際IC日本協会の橋本徹会長の挨拶に続き、先ず、スリランカのカレー等の昼食を堪能しました。小田原市の加藤さんが搗いてくれたお餅も大好評でした。昼食をとりながらの楽しい歓談に続いて、各国の文化紹介が行われました。フィリピンの方々によるキャンドルダンスやバンブーダンス、ミャンマーの民族舞踊、世界各国の言葉で“こんにちは”で挨拶をしてくれた後に箱根小学校児童が披露してくれたソーラン節、日本古来から伝わる素晴らしい雅楽の演奏、そしてスリランカのカピラさんによるパントマイム、そして、最後は、IC女性の会のメンバーが日本と韓国の歌を披露してくれるなど楽しく、また、興味深いプログラムが続きました。このようなすばらしい各国の文化紹介が行われた後で、イニシアティブス・オブ・チェンジが目指すところについてのプレゼンテーションが行われました。箱根や御殿場等からも家族で参加された方々も多く、世界の人々が一つの家族のように楽しく過ごせる機会となったことと思います。

閉会式

15日の閉会式に先立って開かれた午前中の第3回目の分科会では、今後の具体的なアクション・プランや提言を考えたり、会議に参加して決心したことなどが話し合われました。閉会式では、それぞれの分科会の参加者からそれらの報告が行われました。

アクション・プランの紹介

(1) ジャパン・コリア共同プロジェクト

○シンクタンクの創設

学生たちが主体で研究テーマを見つけ、リサーチを行い、レポートを作成する。また、当プロジェクトの活動に関する記録のデータ化を図る。

○サマーキャンプ

2003年8月に、日韓の中学生を主体にしたサマーキャンプを大学生が企画・運営し、この作業を通して相互理解と信頼関係の構築を図る。

○カンボジア・プロジェクト

2004年夏に、日韓の大学生が様々な問題を抱えるアジアの国（候補国：カンボジア等）を訪れ、現地の同世代の青年たちと共に奉仕活動を行う。そして、日韓の青年たちが融和のメッセージを伝える。

○韓国ウォーキングプロジェクト

韓国内を日韓の学生たちが寝食を共にしながらウォーキングすることで韓国の文化や生活について学ぶと共に、様々な韓国の人々との交流を図る。

○ピースベルト

東京から韓国や北朝鮮を経由して中国までの千六百キロを歩き通すイベントに参加し、当プロジェクトの融和のメッセージを各地域に伝え、親睦を図る。

○ネットミーティング

日韓の学生たちが、気軽に意見交換できる交流の場をインターネット上で行う。

(2)「企業の社会的責任を考える」

CRTニューミレニアムは、SAIP－JAPANプロジェクトについて、シナジー効果を発揮する形で連携強化を図る。

■２０～４０代の世代からの視点でSAIP(Self Assessment & Improvement Process：自己評価&改善プロセス）の分析を行う

■４９項目要約の事例集作成

このSAIPは、経済人コー円卓会議で採択された「企業の行動指針」に照らして、その達成度合いを自己評価するシステムです。

そして、現在日本導入に向けて、SAIPをそのまま取り入れるのではなく、日本の法制度や文化に合わせて再構成することを目的として開発しています。

（3）IC教育プログラム・・・提言

参加者たちは、ディスカッションを通して、以下の事柄を一人一人が自覚しようと決意しました。

1．子どもをあるがままに受け入れる。
2．夫婦間において、子どもの教育方針に対する価値観の共通意識を持つこと。
3．子どもを通して親・教師が学ばなければならない。
4．学びは教室だけではない、地域（社会）のなかにもある。
5．心（思いやり）を育てる。

どの参加者も教育に対して様々な思いを持ち、色々な意見が述べられ、とても有意義なディスカッションでした。

（4）国際理解と相互協力

最後の分科会でそれぞれ自分ができることを考える時間を持ちました。その中から次のような決心や考えが述べられましたので、最後の閉会式でも再度参加者全員に話して頂きました。

現在名古屋大学に留学中のフィリップ・クレイグ氏は、『日本で共に学ぶ留学生の友人たちが日本や日本人に対する否定的な会話を始めた時には、自分は日本や日本人の良い点について言及していくようにする決心をしました』と述べました。

また、カピラ・バンダラ氏は、「会議を通して学んだICの考え方をもっとスリランカの人々に伝えていきたいと思います。これからシンハリ人とタミール人の真の和解が必要になるため、ぜひIC(MRA)の会議をスリランカで開きたいと思いますのでどうぞ力を貸して下さい」と話しました。

最後に

今回の会議には、韓国そして北朝鮮国籍を有する在日コリアンの青年たちが参加し、日韓の学生たちのディスカッションの通訳を務めてくれました。また、14日の夜には、『在日コリアンの思いを語る』とのテーマで在日3世のペ・ヨンシムさんがこれまでの様々な体験や日本人や韓国人と接して行く中で感じられたことなどを大変率直に話してくれました。

2泊3日の短い会議ではありましたが、多くの参加者のかたがたのお力添えを得て、充実した会議とすることができました。留学生や海外から来られた方々、そして日本のICユースのメンバーの参加費の援助をして下さった多くの方々、ボランティアで通訳をして下さった通訳者の方々、手作りの美味しいお菓子を差し入れて下さった方々、お茶の準備や受け付け等などご協力下さったIC女性の会（現よつ葉会）やICユースの方々等、皆様に改めてお礼申し上げます。

第26回IC小田原会議に参加して

田中章博　(元キヤノン特別渉外室長)

IC小田原国際会議のすばらしいことは毎回ここで普通の日常生活では出逢うことのないようなユニークな人と出会い、知り合うことである。
ティータイムのとき、私は隣にいた外国人と何となく会話を始めた。彼は暫く日本に滞在して東大の大学院生にユダヤの歴史を講義しているという。そこで私は自分も数人の仲間と一緒に、ポール・ジョンソン(Paul Johnson)の「ユダヤ人の歴史 A History of Jew」をテキストにして読書会をやっていると話すと、彼は私がどうしてユダヤの歴史に興味を持ったのかと尋ねた。
話ははずんで、彼はいつか自分もその読書会にいってみたい、あなたもよければ次の自分の講義にゲストとして招待したいので本郷の東大にこないかということになった。
結局、日程の都合で彼は読書会に来ることはできないけれども、私は彼の次の講義にゲスト参加することになった。この人は、アメリカのコロンビア大学歴史学教授レヴィン (Hillel Levine)先生で戦前リトアニア領事としてユダヤ人にビザを発給して救った杉原千畝に関する本の著者でもある。

分科会では午前中に『国際理解と相互協力』、午後からは『企業の社会的責任を考える』に出席した。
稲岡稔さんがコー円卓会議日本委員会副会長として“企業の社会的責任を自己評価する枠組みと基準”について説明をされた。アメリカ委員会チームの原案の翻訳を終えたので、日本的社会条件をふまえてこれを完成させるとの説明があった。
キヤノン会長 (故) 賀来龍三郎氏が提唱した共生の理念を柱の一つとして完成した日米欧の合作『コー円卓会議、企業の行動指針』が今回の“企業の社会的責任の自己評価、基準原案”の基盤となっていることを知って感動を覚えた。現役時代に私もこの作成にかかわったからである。
参加者のひとりから後で聞いたことだが、東南アジアで未成年者就労、低賃金搾取として世界中から糾弾を受けたアメリカのスポーツ靴メーカー「ナイキ」社は最近、Kyosei (共生) と日本語をそのまま使って企業の姿勢を正そうとしはじめているそうである。日本から発信された企業の哲学がアメリカ企業のグローバル展開で受け入れられている一つのよいケースである。

新しくICと名前をかえて世界中にネットワークをもつわれわれの運動は、これからも世の中をよりよい社会にかえていく良心的な団体として活動を続けてゆく。そしてその活動の根底には常に明確な哲学、魂が生きていなければならない。
それは、「Change (自己変革)、四つの絶対道徳基準、静かな時間を持つ」を一人ひとりが実践してわれわれの活動に魂をいれてこそ、世のひとびとの共感と賛同を呼ぶものと思う。

山下　恭弘（筑波大学二年終了、中国語の学習のため台湾へ留学中）

僕はこの会議に参加して、日韓両国が新しい未来に向かって一歩、歩み始めたことを実感することが出来ました。今回は韓国のお二方の学生をお招きすることが出来ました。彼らは新しい日韓関係を築く上で韓国の側の重要な存在です。また、日韓という枠を超えて、一人一人の人間としてもまた貴重で重要な存在で、今回こうしてめぐり合えたことは今後の人間と人間の交流の原点になると信じています。

僕は普段から愛国心を大事にして生きていたいと思っています。確かにかつての「愛国心」は狭義のもので、他国の利益とは一線を画したところでの「愛国心」でした。しかし、今や地球一体化の時代です。愛国心と唱えて守るべきものは、外国系日本人を含めた日本人の命と財産と権利であり、他国の国益を踏みにじって長期的なわが国の利益を期待し得ない今、愛国心は外国と平和にうまく付き合っていくためのよりどころの精神になると思います。そして、この愛国心はかつてこの国を命をかけて守ろうとした人たちの魂を知り、尊重し、その生き様に誇りを感じ、今後わが国を支えていく時には先輩の名前に恥じないような行動を要求する精神です。そして、外国に出て行ったとき、胸を張って「私は日本人です」と言える精神です。僕は胸を張って「私は日本人です」と言いながら韓国を初め外国の人々と理解し合い、お互いに協力できるようになりたいです。僕は今回会議に参加した人たちのこの愛国心に対する考え方は分かりません。ただ、感じたのはどんな考えを持っていても、やはり韓国の方（外国の方）に日本をより良く理解してもらおう、日本に対して悪い印象で帰って欲しくない、新しいお互いに信用し合える関係を築きたい、という精神を感じました。これは紛れも無い愛国心です。僕は同じ日本人として日本人学生が今回のように集まり、大切な大切な韓国のお客様をお迎えして、相互の理解に共に奮闘できたことに感激すると共に、今後ともよりよい日韓関係が構築できるように共に智慧を絞って奮闘していきたいと願います。

今回、国際会議に参加でき、IC（MRA）の精神に触れ、感動することが出来ました。こうした精神にのっとり、一人ひとりが行動し、発信し融和を草の根的に広げていくことで、世界中が紛争の無い理想の状態に一歩ずつでも近づくと思います。僕はこうした組織が次世代の若者と世界平和のために今回のようなありがたい機会を提供して下さっていることに感動し、自分たちの世代にかけられた期待を認識しました。僕一人の力は本当に微力で取るに足らない思考力ですが、大勢の方々と協力して今後も世界のために貢献できると思うと、自信と感動が沸いてきます。今後ともがんばっていきます。

ICユース 小出　壮一（慶応大学４年生）

「活動」的でありたい。これは私が常々抱いてきた思いでした。つまり、一度しかない人生をどのように使うかということは、まったくもって自分次第です。しかしその一方で、「活動」というものが公的に実践されるものである以上、他者の存在を念頭におかないわけにはいきません。では、「活動」的であるためには何が必要なのでしょうか。

今回の小田原国際会議では私はＩＣユースの一人として初参加させていただいたのですが、日韓関係の問題について様々な角度から多種多様な人々と討論をすることができました。またそういう場に参加する際のスタイルとして、「相手をありのままに受け入れる」というＩＣの考え方を知ることが出来たことは、私にとって本当に素晴らしいことだと思います。そしてほんの少しではあるけれども自分なりにそれを理解し、ほんのわずかでも実践することが出来たのではないかと振り返るにつけ、まだまだスタートしたばかりではありますが、まずは自分自身が「活動」する者の一人としてスタートできたのではないかと嬉しく思っています。またそれとともに、このような場を提供してくれたＩＣに大変感謝しています。そしてこうした考えを日常の生活においても実践することを心がけることが一番大事なことだと言われたことを思い出し、この感想文を書きながら改めて気持ちを引き締めている次第です。

さて、今回の小田原国際会議について思い出すと、まずは小田原へ向かう車で相馬さん、石田さんとご一緒させていただき、車中においても色々なお話を伺わせていただけたことで、小田原国際会議に初めて参加するという緊張感をまったく消し去ってから現地に到着できたことが、大変良かったと思います。初日の午後からユースのメンバーは新聞記者の取材を受けながら一般の方々よりも一足先に話し合いを行いました。翌日の新聞に掲載された記事を見て、自分たちの行動のもつ社会的な意義の大きさを改めて認識し直すこととなりました。初日で忘れてならないのが、ユース・メンバーのイベントとして地元の高校の体育館を借りてバレーボールを楽しんだのですが、（私が一番楽しんでいたという指摘も多かったのですが、）参加していたユースの一体感を作ることが出来たという点で、とても良かったと思います。

また初日の夜もそうでしたし、二日目も二日目の夜も二泊三日という限られた時間を惜しんで、寝る時間を削って深夜まで話し合いを続けたことも、非常に有益でした。紙面の都合上、具体的な内容に関しては省略させていただきますが、ユース・メンバーが各人各様の正直な思いをぶつけ合う中では、意見が全くかみ合わず一触即発の危機にヒヤリとした場面もありました。しかし結果として、最終的にはそうした場面を乗り越えて今後の展開に繋がりそうな興味深い論点をいくつか発見することができました。この小田原国際会議の成果には、私だけでなく他のメンバーもそれぞれ大きな喜びを感じているところです。

また、個人的には自分自身が主体的に行動し、自分の目で見て、耳で聞くということの大切さを痛感し、この夏休みを利用してぜひ韓国を訪れたいと強く思うようになりました。自分が韓国に行くことで、私が知らなかった韓国を知ると同時に、私が知らなかった日本も知ることが出来るのではないかと思っています。

小田原国際会議の後もＩＣユースでは定期的なミーティングを持ちながら、その他にも東京大学のレヴィン教授を訪問したり、この夏のキャンプの実施へ向けた準備に取り組んだり、韓国映画を見に行ったりと、様々な活動を続けています。今後とも多くの方々のご理解とご協力を賜りながら、日韓の相互理解の促進と、東アジアの平和と友好のために、自分たちが出来ることから一歩ずつ取り組んでいきたいと思います。

ICユース　渡瀬　裕哉（早稲田大学３年生）

昨年に引き続き本年も小田原会議に参加し、様々な人たちと交流できたことは非常に意義深いものでした。その中でも私にとっては韓国から来た２人の友人との出会いが一番印象的でした。この２人は一人は非常に明るいタイプであり、もう一人は物腰静かなタイプでした。私はこの２人のホストファミリーをつとめましたが、まさに発見の連続でした。韓国と日本の食事の類似性から始まり、儒教という思想基盤に根ざした２つの社会の文化的類似性まで多くのことを学ぶことができました。私の読書生活では丸山真男をはじめとして思想に関する本を読むこともあり、このような体験は日本を改めて再考するのに良い機会になったと思います。

相手の立場に立つということについてもだいぶわかった気がします。もともと、私は我が強い性格なもので、あまり相手に対して何かを配慮することが苦手な性格です。しかし、韓国の２人と触れ合っていくうちに少し自分の中で変化が生じたように思います。日韓の融和に向けての話し合いをしていく中で、もしも自分が相手の立場であればそのように振舞うかについて考えたことがきっかけでした。おそらく、日韓の間の問題は理性では納得できても感情的には納得できないことも多いでしょう。私にもまだまだそういう面が残っているということを再認識させられた良い機会でした。今後も日本と韓国の間の摩擦は続いていくものだと思います。たとえ、それが日韓基本条約によって既に決着が合理的についていたとしても。感情的な問題というものはそういうものなのでしょう。しかし、そのような気持ちの縺れは徐々に解きほぐしていくことはできると信じたいです。たとえば、サッカーを通しての文化交流は日韓の間に大きな進展を生み出したことでしょう。（実際ホームステイに来た２人も日本選手を良く知っていたのでビックリさせられました。）

私は将来にわたって少なくとも我が家に来た２人に対しては良い感情を持ち続けると思います。そして、そのような感情というものをできるだけ多くの韓国の方々にもてるようになりたいと思います。そして、自分以外の日本人もそのようになってほしいと思います。

今後の自分の活動を通してその一助となることができればそれに代わるものはありません。

◇◇◇ICニュース◇◇◇

よつ葉会（元IC女性の会）の新しい出発

昨年12月、女性の会の発足以来、会の代表を務めてこられた藤田寿子さんより、代表交替の要望があり、協議の結果、会の代表は、和田マリアンネさんにバトンタッチされました。これを機に会のあり方が検討され、初心に返って、それぞれの使命を、そして社会への役割を見出し、又、お互いをよりよく知ることで、信頼関係を深め、学び合う中から、一人ひとりの才能を見出し、それを家族の中、社会の中で、個人として、又、グループとして、どのように生かしてゆけるかを考える場とすることになりました。尚、会の向上と充実を図るため実行委員会を設け、運営をそこで協議することにしました。更に、5月に１００回を祝い、それに伴い名前の変更も検討され「よつ葉会」と致しました。これは、よつ葉のクローバーの幸運と、ＩＣの四つの道義標準（正直、純潔、無私、愛）とを表しています。

月例会の活動内容をご紹介します。

○ストーリーテリングを行います。

これはメンバーの方々に、ご自分の人生の転機について、充分な時間（一時間程度）かけて、お話をして頂き、それを皆でシエアーして、各人に自己啓発の契機として頂くもので、今後も続けて参ります。

○恒例の一泊リトリート（「退去する」「交替する」の意で、忙しい日常生活から離れて、美しい自然の中で、自己の心の内を検証する時間を持つこと）を行います。

○チャリティーバザーを１年１回行います。

今まで行ってきたこれらの活動以外に、今後は更にいろいろな活動をしてゆく予定です。皆様のご参加をお待ちしています。尚、お問い合わせは、IC事務局03－5459－5703までお願い致します。

ジャパン・コリア共同プロジェクト 第二回訪韓準備プログラムについて

皆様にご支援いただきましたサマーキャンプも無事終了し、現在は今年12月19日～24日に韓国MRAの主催（韓国政府後援）により開催される「日韓青年フォーラム」に向けて日本サイドでの準備をICユースが中心となって進めております。今年の小田原会議で日本のICユースの認識をもう少し合わせる事ができたのではないだろうかとの反省に立ち、今回の日韓学生間でのディスカッションに向けて、様々な背景のゲストの方々（下記のリストを御参照ください）をお招きし、「誰が正しいかではなく、何が正しいか」といったICの理念も参考に、多様な考えを聞いた上で、自分達なりの考えを持とうということで活動をしています。下記の日程の他にも、2週間に一度学生同士でディスカッションを行ったり、ビデオ等を見たりして認識をさらに深めるように努めています。

過去の過ちを繰り返さないために、新しい日韓関係のあり方を互いに考え、参加者相互の信頼関係と友情を育む一助にできればと願っています。

9月30日（火）	第１回講演会　相馬雪香 国際IC日本協会名誉会長（終了）
10月13日（月）	第２回講演会　李昌興氏（東京民族教育対策委員会 事務局長）（終了）
10月26日（日）	第３回講演会　在日韓国人の方（交渉中）
11月１日（土）	第４回講演会　韓国人留学生の方（交渉中）
11月23日（日）	第５回講演会　政治家の方（日本）（交渉中）
12月７日（日）	第６回講演会　在日一世の方（北朝鮮・韓国）（交渉中）
12月13日（土）	IC年末懇親会で報告会を開催します。

◆ニュースの発行が遅れましたことをお詫び致します。当協会の国際IC日本協会への名称の変更に伴い今号からIMAJニュースよりIIAJニュースと名称を変更致しました。